

秋の越後平野の旅

千葉市花見川区 小林 敬

10月6日、上越新幹線 Max とき 317号は上野発 10時18分。少し早目に着いてホーム先端をブラブラしていたら、乗り込む予定の運転士が歩いてきたので、しばし歓談。目の前を通過する列車は、三連休の初日のわりにはどの列車も空席が目立つ程度の混雑のしかただった。

10時18分定刻通り発車。二階建車両の一階席は、走っている間は高架のコンクリート壁しか見えずつまらない。とは言えどもこの車両の二階はグリーン車、上へ移動することはできない。停車駅でホームを歩く女性の脚を眺めて、我慢我慢。

<1> 信越線の車窓の旅

長岡 11時54分着、乗り換え時間が47分あるので昼食をとることにして駅の中を探し歩いて見た。新幹線車内の冷房で体が冷えてしまった感じがするので、温かな麺類でも食べたいと思い新幹線の駅の中にあるコンコースを歩いて見た。そこにあるものは、何とカタカナと横文字だらけのバター臭い店と全国ネットのチェーン店ばかりで、目指すお店は見つからなかった。何のことはない、新幹線ができて銀座や原宿が入り込んできただけの話で、肝心の地元のお店は消滅してしまった感じである。この現象が日本中に蔓延していることを思うとぞっとするがもはや手遅れ。

駅舎内をあきらめて駅の外へ出て見たら、駅前広場の一角にラーメン屋を一軒見つけて行ってみたら満員でしかも10数人の客が並んで待っている。諦めて駅の中のパンや（東京・千葉で数多く見るチェーン店）でパンを買って昼食。

おかげで時間的に余裕ができたが、曇り空でやや涼し目なので散歩は止めて信越線のホームに入り、発車を待っている新潟行に乗車。雪国の列車らしく半手動（半自動？）のドアを開けて乗りこむ。

12時41分発各駅停車新潟行は定刻どおり発車。**長岡**の町の中心部は信濃川と魚沼丘陵に挟まれている。信濃川の向こうには東頸城丘陵もあり、山に守られている感じがする町だ。右に山、左に越後平野を見ながら新幹線と並走。僅か数キロで次の停車駅の**北長岡**。ここにはまだ長岡の名残が残っている。

押切（おしきり）の駅に入る直前に「大口レンコン」と書いた大きな看板が待ち構えていた。「大口レンコン？」と独り言を言っていると、視界にレンコン畑（沼地）が入って来た。

押切という地名のいわれが気になる。稲藁を切る道具を「押切」と言うが、由来はこれだろうか？

並走していた新幹線が少しずつ離れて行き、住宅地も少しずつ姿を消して農地が増え始めて来た。田圃は収穫が済んだばかりで、まだひこばえも伸



びてはいない。

そして遠くに弥彦山。

見附 (みつけ)、地名の名前の由来が気になる。江戸時代に見附組の代官所が置かれていたという情報の他に、刈谷田川が頻繁に氾濫して水に浸かることが多かったことから「水漬け (みつけ)」という地名が生まれたという情報もある。高校生らしい一群が乗りこんできた。女の子だけの集団、男の子だけの集団、男女が入り混じった集団、いくつもの集団が非同期の雑談を繰り広げる。健康的な肌の色、白い歯、屈託のない会話にしばし見とれてひとときを過ごす。

帯織 (おびおり)、三条市は包丁や金物で有名だが、その中でもこの辺りは帯を織っていたのだろうか。美しい響きの地名だ。信越線の駅は、地名の由来が気になるような味のある名前が多いが、歴史の流れに埋没してしまわないようにと願うばかりである。

東光寺 (とうこうじ)、遠くになった新幹線の高架線とその向こうに見える弥彦山はいくらか大きく見えるようになった。遠くになった新幹線に変わって防風・防雪用の樹木に囲まれた立派な造りの家が点々と並ぶ景色が車窓の主役になってきた。

地図で駅周辺を眺めまわしても東光寺というお寺は見当たらなかった。高校生たちの何人かが下りて行ったが、会話はまだまだ続いている。50年前の山手線の車内にいる自分たちを思い浮かべながら耳を傾ける。

三条、殆どの学生たちが下りてしまい、車内が急に静かになってしまった。ひたすら平坦に広がる越後平野の水田の向こう側に弥彦山が平野の守り神のように立っているのが印象的だ。

三条を過ぎると信越線は東に大きくカーブして東北東へ進路をとるようになり、あっという間に新幹線は視界から消えて行った。それでもなお弥彦山は遠くからしっかり越後平野を見渡しているかのようだ。

五十嵐川を渡ると**東三条**、駅間距離は2Kmにも満たない感じの近さだ。

右手車窓には海拔200m前後ではあるが山並みが近づき、越後平野の末端を感じさせるようになってきた。その代わりに左側の車窓には延々と広がり続ける越後平野の水田、そして小さくなった弥彦山。

物静かで控え目な駅**保内 (ほない)**を過ぎると国道403号線と並走するようになり、しばらくで**加茂**に到着。

加茂の町中を突き抜けるように流れる加茂川は信濃川に向かって元気に流れている。加茂川を渡ると加茂市から田上町に変わり、列車は徐々に北北東に針路をとるようになった。進行方向右側の車窓には山並みが迫り、左側の車窓は信濃川に近づいていること感じさせる景色。さほどの高さでもない穏やかな起伏の稜線は、里の営みを上から眺めるような優しさが感じられる。これが本当の里の山、里山なのだろう。

羽生田 (はにゅうだ)、ここからしばらく「田」がつく駅名が並ぶ。集落の生業を感じさせるわかりやすい地名だ。埼玉県羽生市の地名起源として「埴輪の転化」と言う説があるようなので、ことによると「埴輪が出土された田圃」なのだろうか？想像が膨らんで面白い。

勝手な想像をめぐらしている内に**田上**に着いてしまった。半自動のドア開けて下車して、跨線橋を渡って無人の改札口を出た。立派な駅前広場もあるが、送迎と思われる数台の車が止まっているだけの静かな駅。何よりも駅前にコンビニエンスストアやチェーン店がないのがいい。

信越線は新潟に向かって静かに走り去った。列車が来ると様々な息づかいが交錯し、列車が去ってしまえばただの「静かな空間」になってしまう。これが「生きている田舎の駅」、この空気が好きだ。

この先は、**矢代田 (やしろだ)**・**古津 (ふるつ)**・**新津 (にいづ)**・**さつき野**・**荻川**・**亀田**・**越後石山**そして終着駅の**新潟**。もう少し乗っていたかったが仕方がない。

5分ほどで訪問先のご夫婦が車で迎えに来て下さった。行き先は、この地の豪農の田巻家の跡が文化財として残されている椿寿荘(ちんじゅそう)。今回の旅の目的は、椿寿荘で夕方から始まる「全国社会人落語祭り」。

<2> 田上の町

田上の駅前広場の向こうには海拔 70~80m の山が迫っているが、決して威圧的でも猛々しくもない。この山の稜線は護摩堂山・菩提寺山など仏教的な名のついた海拔 200m 級の山に続いている。おそらく町の鎮守的な役割を持っている山に違いない。この山の裏側に今晚の宿である湯田上温泉がある。駅の反対側は、このまま日本海まで続くのだろうか、平野が果てしなく広がっている。

椿寿荘に落ち着いた後、時間があるので付近を散歩してみた。17時から始まる「全国社会人落語祭り」に備えて早目の夕食を摂るのが目的だったが・・・。

農業用資材を売っている店をぶらぶらしたり、つぶれてしまったラブホテルや床屋を覗き込んだり、溜池で写真を撮ったり、気ままな歩きを続けるうちに何軒かの食堂を見つけたがすべて休業。集落の中ほどにある八百屋とも雑貨屋ともつかぬ小さな店を覗いて見たらお弁当を売っていた。これを逃したらもうないだろうと思い購入に踏み切った。何と 250 円、ペットボトルのお茶をつけても 400 円でお釣りがきた。

次の悩みは「どこでこれを食べるか？」だ。大都会ならば路地裏に入れば小さな公園があるのだが、ここにはそんなものはない。路地裏に入ると民家の勝手口や物置があり、人の目を気にしないような空間はどこにもありはしない。田舎の町ではあるが、適度な密度で家並みが連なっており、腰を下して弁当を食べるような場所は見つからない。最後の手段、つぶれたラブホテルの敷地の中に入って、壊れた軒先に腰を下して食べ始めたら老婆が歩いてきた。私が何をしているのかを見るわけでもなく、無頓着に通り過ぎて行った。



も大変だっただろうが観客席にとっても相当の疲労感があった。

湯田上温泉のホテルにチェックインしたのは 21 時。高台にあるホテルの 6 階の展望風呂から新潟の町の灯りを中心に広がる越後平野の夜景を楽しみ、自動販売機で買った日本酒で今日の一日の締めくくり。

<3> 田上から亀田へ

二日目の「全国社会人落語祭り」は、新潟市江南区亀田に新装なった江南文化会館のオープン記念イベント（こけら落とし）を兼ねて 13 時から開かれる。落語祭りの出演者・運営スタッフの皆さんの好意で、車に便乗させていただき亀田に移動することになった。



椿寿荘は立派な枯山水の庭を持つ屋敷で、彫り抜きの欄間や厚さ 10cm 余りある桧の一枚板の濡れ縁など目を見張るような造りが随所に見られる。

60 畳もあるかと思われる大広間で繰り広げる「全国社会人落語祭り」。北は山形、南は福岡から集まった社会人落語の仲間が繰り広げる落語七題に漫才と紙切りはものすごい熱気に包まれた。演者たちが全力投球する三時間余の大イベントは、運営スタッフ



9時に宿を出発して国道403号線を北上。昨晚の落語祭りの話、その後の打ち上げの話に始まり地元の風景などの紹介・説明さらには雑談を重ねながら国道403号線を北上。南から北へ進み新潟港に注ぐ信濃川が、南東から北西に向かって迫って来る阿賀野川に圧力をかけられるような形に見えるところが新津。信濃川は弥彦山の南にある大河津分水路からも日本海に落ちるようになっているので、新潟市内の流れとしては阿賀野川に大きく力負けして見える。いずれにせよ越後平野はこのふたつの大河によってできている。

果てしなく続く平原、これでもかと言うように連なる水田、この肥沃な越後平野が日本人の食生活の一部を支えている。田上では真西に見えた弥彦山が少しずつ南西に下がって行くのがわかる。遠ざかりはしても弥彦山は越後平野の守り神だ。どこにいても必ず見えるので方角がわからなくなる心配はない。

平野の北端に新潟市内のにぎわいが感じられる風景に変わり始める頃に亀田の江南文化会館に到着。



農業を主だった業としていられる立派な佇まいの家、その周りに広がる農地、その平坦な町の中に白亜の殿堂のように威風堂々と建つ文化会館・図書館などの公共施設群、政令指定都市新潟の息吹を感じる。

新しい建物の匂いが漂う館内で「全国社会人落語祭り」の準備を手伝っている内に開場時刻になった。

落語10題・マジック・紙切り・漫才、定員400名の会場は満員でしかも大変よく笑うお客さんばかりで、まさに割れるほどの笑い声、途中で帰ってしまうお客さんは見当たらなかった。

<4> さらに新潟

江南文化会館の「全国社会人落語祭り」が終わった後は亀田駅近くの飲み屋を借り切った打ち上げに参加。

社会人落語祭りに出演した人・運営に携わった人・裏方及びその手伝いをした人、さらにそれを見に来た人が加わり満員のお店は熱気ムンムンの状態。落語に関するありとあらゆるアングルからの雑談が飛び交い

愉快地、しかもあっという間に時が流れた。

東京行き最終の新幹線に乗るために、まだまだ盛り上がりが続いている打ち上げを中座してお店を出たのは21時頃だったろうか。

亀田21時15分発に乗り、新潟着は21時24分。酔ったあとの8分の乗り換えは忙しい。

21時32分発Maxとき352号、往路同様に混雑はなく、缶ビールと雑談と駄眠(爆睡?)。

上野から銀座線で日本橋へ、日本橋0時02分発東葉勝田台行最終電車に乗ったのは何年ぶりだろうか。

二日間の愉快的な旅を終えて、入浴後床につく時に時計を見たらもう2時を過ぎていた。(2012.10.22)。

以上